

3・11を思う人々

テンション（北海道）

子育て支援のNPO法人が主催する「福島
島の現状をお聞きする会」に参加した。
お話ししてくださったのは、子ども達を安
心できる環境でのびのびと遊ばせてあげ
たいと、夏休みに福島から北海道に来て
いる、あるお母さんだ。

彼女の話から知ることができたのは、
福島に暮らす普通の人々の普通ではない
生活だった。子ども達が毎日、線量計を
身に付けて外出すること。子ども達は公
園や自宅の庭でさえ、土にまみれ、虫を
追いかけて自由に遊びまわることが許さ
れないこと。小学校から帰ってきた子ども
も「僕たち二十歳になったら死んじゃ

うんだよね？クラスの皆がそう言ってた
もの」と話したこと。大人の誰もが、3・
11前までと同じようには暮らせないこと
を認めていても、安全に安心して暮らす
具体的な話になると、夫婦間でさえ、考
え方に温度差があり喧嘩になってしまっ
たこと。ましてや友人、地域の人々との間
では、話がこじれ、仲違いに至ることも
あるそうだ。それを恐れ、安全に安心に
暮らすことを、皆、今ではほとんど話題
にしないと聞きした。

僕は子ども時代、のびのびといろん
なところで自由に遊んでいたっけ。そし
て、僕らが親になった時には、子ども達
に事故や大きな病気・怪我をさせないよ
うにと気をつけた。今思えば、子ども達
の安全について夫婦間で大きく考え方が
違う事などなかった。というより、考え
方に大きな違いが出るような難題に直面
することがなかった。

僕なら、今どうするだろう？「福島に

仕事があり家族を支えなくてはならない。
いろいろな事情があつて福島を離れるこ
とができない。それなら、僕だけ福島に
残ろう」「でも家族バラバラでいいのだろ
うか？子ども達は寂しくないだろうか？」
ちよつと想像しただけでも、考えがまと
まらない。

そもそも、この難題は、福島の人・個人
に課された問題なのだろうか？安全に安
心して暮らすということは特別なことな
のだろうか？それは家族と、あるいは友
人と別れなければ得られないものなのだ
ろうか？

いや、違う。これは、今の時代を生き
る僕ら全員の問題である。

かつて僕らが無心に遊んだあの場所、
あの時。あの自由と安心感。ごく当たり
前のそれらは僕らの周りの大人、その前
の時代を生きた人々から引き継がれた贈

り物だった。

そして僕らは、更なる豊かさを求め、
原発とそのリスクを取った。そこに巨大
地震が起きた。

3・11で失われたあの贈り物、あるこ
とが当たり前前の安全・安心と自由を、次
の世代を担う子ども達のために取り戻そ
う。そしてまた、いっどこで起きるか
わからない天災・人災・テロ：で、二度と
失うことがないように、僕らの知恵と行
動と勇気が試されている。

